

社会浄化をめざす●せろん じほう

世論時報

平成25年

8

昭和43年8月23日第三種郵便物認可
平成25年8月1日発行(毎月1回1日発行)
第46巻第8号(通刊747号)

特集 音楽が人間を育てる

●投稿

原発事故から2年後の静かすぎる騒動

●話題

金沢市・岩井柔道塾主に聞く 学校での柔道と体罰

東光西風

現代に「純潔」を問い直す

子ども達のメッセージ

ひさい地から
やって来たかずき君



アイルランド発の教育プログラム 音楽が持つ目に見えない力が 若者達に生きる力を発見させる

松浦貴昌 NPO法人「プラストビート」代表理事

高校生や大学生達が、自分達だけで音楽会社を立ち上げ、音楽イベントの企画・運営に挑戦する。ライブ会場の手配、出演者との交渉、そして利益の25%以上を、自分達が応援したいNPOや社会的な活動に寄付をする。そんなアイルランドで生まれた教育プログラムを日本に広めている松浦貴昌さんに話を聞きました。

人生を変えたミャンマーのお坊さんとの出会い

音楽を始めたのは、高校の時にバンドをしていた友達から、「ベースがないからやってくれないか?」と言われ、「まあ他にやることもないしな」と、軽い気持ちで引き受けたのがきっかけです。それ以降、音楽

を創り上げる楽しさと、お客さん達に伝える空間を創り出す楽しさ、その目に見えない楽しさを創り出すことが楽しくて、どんどん音楽にのめり込んで行きました。

高校生のバンドであれば、普通はせいぜい文化祭で演奏するくらいですが、「もっと格好いい照明や、音響の中でライブがやりたい!」と、

結局自分達で音楽イベントを立ち上げてしまうことになりました。直接、ライブハウスの人と交渉して、場所を貸してもらって、持ち込む機材も揃えて、チケット作成も集客も自分達だけでやりました。

高校を卒業した後も、バンド活動を続けていましたが、25歳の時に、父の会社が上手く行かなくなり、自





宅が競売に掛けられる事態になりました。私は四人兄弟の長男でしたし、それまで自分の好きなバンドしかしていなかったのも、もうバンドはここで辞めようと思っていました。

そこから、一転してビジネススクールに通い、27歳の時に、「元々俺はバンドマンだ、失うものなんかない」と、職歴もなままマーケティングの会社を創りました。そこからがむしろに働き始めたわけですが、そんなある時、ご縁があり、あるミヤンマーのお坊さんに出会ったのです。

私は中学生の頃にいじめられていて、一度は死のうかと思ってくらいの傷を負ったこともありました。その他にも人に裏切られた経験などから、人のことが信じられない状態が続いていました。表面には出さなくても、心の奥底では、人を疑っている自分でした。

しかし、そのミヤンマーのお坊さんとの出会いがきっかけで、少しずつ心が開き、人を信じる心が再び生まれれてきました。

ミヤンマーのお坊さんと一緒に、カンボジアの子ども達への支援を始めるようになり、カンボジアの子ども達のキラキラした目や純粹な心に触れることで、私自身が変わって行くのを感じました。

ブラストビートとの衝撃的な出会い

そして、除々に途上国支援にのめり込んで行っただけですが、ある時、「これは他の人が立ち上げてくれたもので、別に自分じゃなくてもできるよな」と思い、「自分にしかできないものは何だろう？ 自分の使命は何だろう？」と漠然と考え始めました。

そんなことを考え始めていた09年の夏、たまたまNHKを見ていたら、ブラストビートのドキュメンタリー番組をやっていたのです。その番組を見ながら、私はもう号泣状態で、涙が止まらないのです。自分の中では、「これは神様からの啓示だ」と本気で思いました。

番組を見終わった後に、すぐブラ

ストビートの創始者である、アイルランド人社会起業家のロバート・ステューブソン氏に「この活動は素晴らしい。是非日本でブラストビートをやりたいんだ。仮にロバートがダメだと言っても、僕はやるよ。同じプログラムを真似してでもやるからね」と脅し文句のようなメールを送りました。

自分が高校生の時に経験した音楽イベントの立ち上げ、その中で仲間ができて、繋がりができて、自己肯定感ができて、色んなものに挑戦できるようになった。また、途上国支援を通して、人に貢献することの喜びを知りました。私のこれまでの人生の素晴らしい経験を全て合わせたものが、まさにブラストビートそのものだったのです。

ロバートは私の熱意を汲んでくれて、日本に来た時に「お前に任せるよ」と言ってくれました。

メンバー達との絆の深さがプログラム成功の判断基準

ロバートは元々音楽プロデューサー



学生達が企画・運営した音楽イベントの様子。来てくれた若者達の中には、「こんな空間を自分達の同世代が創り上げたのか」と刺激を受ける人も多い。

ーで、アイルランドの若者がドラッグや非行に走る姿を見て、そのエネルギーを音楽に向けさせようとして立ち上げたのが、プラスチックビートというプログラムでした。

日本のプラスチックビートの場合は、ヤンチャな子や、引き籠^{こも}ってしまっている子、偏差値の高い学校の子など、多様な若者達が参加しているのが特徴です。

実際のプログラムは大体10人ぐらの高校生や大学生達で1つのグル

ープを作り、その1グループに対して、メンター（寄り添う助言者）が3〜5人つきます。学生達は、自分達の会社名や会社の理念、会社の名のデザインなどを決める所から始めます。さらに、その10人の中から社長や財務担当、マーケティング担当など、実際の会社組織にならって、それぞれ役割も決めます。

メンターさんの中でも、役割分担を考えるのが重要です。現代の教育でも、誰かがたったひとつの正解を

持っているわけではなく、誰か一人のメンターさんが「こうやるのが正解だ」とは言えないと思うからです。

そのためにメンターもチームになって、お父さん、お母さん、お兄さん、お姉さんなどの役割を受け持ちます。例えばお父さんが厳しく怒るタイプであれば、「あなたはそれでいいのよ」と優しくフォローしてくれるお母さん役がいて、そして、プライベートの相談にも乗ってくれるような、お兄さん、お姉さん役がいるというカタチです。4人とも怒るお父さんタイプだったら、もう学生達は辞めたくなくなりますからね。

お父さん、お母さん役の人は、昼間は別の仕事を持っていて、夜や週末だけ参加してくれる社会人メンターさんで、世代も職種も多様です。年齢では、上は73歳のおじいさんもあります。そのおじいさんは、高校生に会うのを楽しみにしてくれていて、「自分のほうが元気をもらうんだよ」とよく言っています。

答えが一つではないという前提の上で、多様な世代、職種のメンター



さん達から、色々な価値観や考え方を学びながら、自分達で軸となる考え方を作って行くということを学生達は行なっています。

一番のゴールにしているのは、「人との繋がり」です。一般の教育プログラムは偏差値がいくつ上がったかなど、数字で表すことが重要視されますが、ブラストビートを通して得られた成果は、数値化できません。

音楽イベントの集客人数や、売上金額、寄付できた金額なども大事ですが、それ以上に、プログラムが終わった後も、メンターやグループの仲間達それぞれと深い繋がりができているか。そして、これからの人生もお互いに寄り添って、助け合いながら生きて行けるような繋がりができているかが、このプログラムの成功を決めます。

響きを伝える空間を創り出す素晴らしさ

もう一つ大事にしていることは、「恩送り」です。一般に聞く恩返しは、恩を受けたその人に返すことです

が、恩送りは、恩を受けたその人に返すのではなく、次の後輩であったり、次の世代の人達に恩を送って行くということなのです。

お兄さんやお姉さん役のメンターの人達は、過去のブラストビートのプログラムの経験者がほとんどです。自分達が高校生や大学生の時に体験したことを後輩に伝えたいという事で、メンターをしてもらっているのです。

3年半の活動の中で、プログラムの参加者はのべ350名、メンターさんはのべ100名を超えました。

過去に、「ブラストビートのプログラムを音楽じゃなくて、スポーツや漫才でもやれるんじゃない?」と言われたことがあります。私は、「どうぞ、あなたなりの方法でやってみて下さい」と答えました。ただ、私の中では、ブラストビートは音楽だからこそ思っています。

音楽は「響き」だと思ふのです。どういう想いで、どういう音楽を奏するかで、創り出される空間が違って来ます。その空間の中で、音楽の

響きが、目の前にいる人達にどんなに伝わって行く。そんな体感を、私自身もアーティストとしてたくさん経験してきました。そんな響きの空間を創ることがどれだけ素晴らしいことかというのを、学生達にも体験して欲しいと願っています。

プログラムが終わって、キラキラしている学生達の眼を見るのが私の一番の楽しみです。そういった学生を一人でも増やして行くことが、私自身の恩送りです。(文責・編集部)

東方医学と西洋医学の統合医療

(医)長白会

 タニクリニック

<http://www.taniclinic.com/index.html>

〒100-0006 東京都千代田区有楽町1-9-1

日比谷サンケイビル3F

TEL: 03-3201-5675

E-mail: mail@tanclinic.com